

未来眼やまがた 第10回

地域に誇りを持つことが観光振興のカギ

日本では、2003年から「ビジットジャパンキャンペーン」を掲げ、2010年までに訪日外国人を倍増しようと取り組んでいる。また山形県でも、昨年「やまがた観光振興プラン」を策定するなど観光に力を入れている。なぜ今、観光が注目されているのか、山形県は観光にどのような取り組みべきか、山形県ご出身で株式会社ジェイティービーの代表取締役会長船山龍二さんに聞いた。

■ 日本の成長と旅行業の成長

町田 日本は観光立国、山形県も観光立県を目指しています。観光業界を代表するジェイティービーの会長が山形県のご出身であるというのは、大変心強い限りです。会長が観光業界に進まれたきっかけは何でしたか。

船山 私は山形市で生まれ、月山、朝日連峰、蔵王、葉山などの山々に囲まれて育ちました。そして「この美しい山々の向こうに、何があるのだろう」と興味を持ちました。私が幼い頃は、テレビもありませんでしたから、見知らぬ土地に対する憧れがありました。それを視覚的に実現してくれたのが地図です。地図に興味を持ち、山形の高校を卒業後に東京教育大学に入り地理を専攻しました。そして卒業後に、当時の(財)日本交通公社に入社した次第です。

入社した1962年は、2年後にそれぞれ東京オリンピックの開催、新幹線と東名高速道路の開通、さらに海外旅行の自由化が行われるなど、非常にエポックメイキングな時期でありました。

町田 その後、40数年間の職業人生を振り返って、印象に残っていることは何ですか。

船山 入社後すぐ、外国人営業部に配属されました。当時この部署は英語で“Tours & Cruises”と呼ばれたように、船で旅行する時代でした。当時は1ドル360円の時代で、さらに1970年には大阪万博があり、多くの外国人が来日しました。また、この万博を機に国内でも団体旅行がブームになりました。

1970年代から80年代の旅行業界を振り返ってみると、日本の経済成長と並行して、新幹線、航空機、あるいはホテルや旅館など、旅行に関わる供給が増え、量的にも質的にも大きく成長しました。さらに、日本人の可処分所得の増加や、為替の円高などが日本人の海外旅行ブームを後押ししました。

しかし90年代に入り、湾岸戦争、テロ、イラク戦争、それからSARS、あるいはバブル崩壊など旅行業界にとっては非常に厳しい時期も経験しました。

■ 観光の目的は「安らぎ」へ

町田 海外も数多くお出かけになられたと思いますが、特に印象に残っている場所はありますか。

船山 たくさんあって、この場所が一番とは言い切れませんが、ただし、良い場所というのは「行って、安らぎを感じる」ところです。

町田 観光は、それぞれ見る人の価値観によって「こ



●町田 睿 (まちだ・さとる)

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、94年株式会社荘内銀行取締役副頭取就任、95年より現職。

れが良い」という基準は異なると思います。私どもは、山形に多くの方々に訪れていただきたいと願っていますが、そのために山形が持っている多くの観光資源のどこに光を当てるのが大切になると思います。

船山 そこが重要なポイントです。今はかつてのような団体旅行の時代は過ぎ、個人旅行が中心です。さらに周遊型から滞在型の旅行に変わっています。この個人旅行化、ならびに多様化は、日本だけでなく世界的傾向です。一言で「団塊の世代」といっても、旅行の目的はさまざまです。豪華な旅行をする人もいれば、ヒッチハイクしながら旅行を楽しむ方もいます。また、歴史的なものを見るのが好きな人、あるいは海辺でゆっくり過ごす人などさまざまです。

そのため旅行会社の商品は、団体旅行中心の時代には少品種大量型でしたが、現在は多品種少量型と変わり、多様な旅行商品をいかに皆さんに提供するが課題となっています。

町田 最近感じるのは、年齢とともに人生の味わいが増え、さまざまなことに関心を持ち、学びたい意欲が湧いてくることです。その点でこれから日本では、いろいろな機会を通じての生涯学習が大事になってくると思います。

船山 ジェイティービーで発行している「るるぶ」という雑誌があります。これまでテーマは「見る・食べる・遊ぶ」としていましたが、新しい「るるぶ」では、「交わる・体験する・学ぶ」をテーマとしています。旅行というのは、「見る・食べる・遊ぶ」だけでなく、その土地のお祭りに参加したり、あるいは農業体験をしたり、またその体験を通じて地域の人と交流して、そこで学ぶことです。また、これから重要になるのは「三つのコウ」だと思います。コウというのは、健康、学校、それから旅行です。

町田 なるほど、いいですね。

船山 この「3つコウ」（健康・学校・旅行）を結びつければ、さまざまな可能性が出てきます。それを実現できるフィールドとして、山形は最適だと思います。

■ 地域の人が観光の主役になる

町田 山形県の観光統計によれば、県内の観光地を訪れる観光客の半分は県内の人です。これからは県内外から、特に多くの高齢者の方々に山形に旅行に来ていただくこと、しかもリピーターとして何度も足を運んでもらうことがポイントになると思います。

船山 そのために、今までの団体旅行中心のサービス提供ではなく、滞在している間にいろいろなメニューがあることが必要です。



●船山 龍二（ふなやま・りゅうじ）

1940年山形市生まれ。1962年東京教育大学理学部卒業後、(財)日本交通公社(当時)入社。経営企画部長、取締役九州営業本部長、常務取締役人事部長等を歴任後、1996年代表取締役社長、2002年より代表取締役会長。日本観光協会副会長、日本ツーリズム産業団体連合会会長等も務める。2003年より立教大学観光学部教授を兼任。

庄内であれば、鶴岡を訪れたら、酒田や周りの市町村を含めた、多様なメニューを用意し、またそこまでの交通手段、さらにその観光地を案内してくれる人などをうまく組み合わせることが重要です。

つまり、旅行は多品種少量の時代だからこそ、メニューをたくさん用意して、必要ならそれを解説する先生、解説者が必要です。例えば自然の中を散策するエコツーリズムでブナ林を散策するならば、そのブナ林の説明や、その地域の自然環境、歴史、文化、宗教の話などいろいろな切り口が必要です。

これからの観光では、旅行業界が提供できるのは一部にすぎず、むしろ地域の住民が主役にならないといけない。

町田 その通りだと思います。山形県でも地元で案内してくれる地域ガイドや観光ボランティアが活躍しています。さらに、地域住民みんなが良き観光案内人になることが大事です。

船山 以前、上杉鷹山のお母さんが生まれた、秋月藩という小さな観光地をたずねました。ふらっと歩いていると、自転車に乗った地元の中学生が「こんにちは」とあいさつしてくれ、大変すがすがしい気持ちになりました。

もちろん旅行すると、美味しい食べ物や、美しい景色の印象が残ります。しかし、旅行者にもっと印象に残るのはその地域の人とのふれ合いです。飲み屋に行ったときに親しくなった人、親切な運転手さん、あるいは旅館の仲居さんなどが印象に残って「また行きたい」と思うケースが多いのです。このような、観光客をもてなす心は、山形の人には優れたものがあると

思います。

町田 私もそのように思います。昨年10月、チャーター便で中国から庄内に観光客が訪れましたが、その際のアンケート結果でも「庄内の人は礼儀正しく親切」という感想が多く見られています。その意味で山形県には立派な観光の力がありますね。

船山 もてなしの心は大切な山形の観光資源です。全国の旅館ランキングでも、山形県の旅館の評価は常に上位であることがそのことを裏付けています。

■ 誇るべき山形の観光資源

町田 また、山形の自然環境も素晴らしい観光資源だと思います。雪は生活者にとってはマイナスイメージですが、台湾からのお客さんは雪を見たくて山形を訪れます。山形にはそのような多くの優れた観光資源があります。それらをどのように掘り起こして、組み合わせさせていくかが大事ですね。

船山 これからの観光のキーワードは、先ほども申し上げた通り「安らぎ」です。私は水田を見ると心が安らぎ、ほっとします。先日、タイのチェンマイにある新しいリゾートを訪ねました。コテージが田んぼの中にありますが、わざわざそのような場所を探して建設したようです。

山形県には庄内平野、米沢盆地、山形盆地と美しい安らぎの風景がたくさんあります。農林水産省が主催した「美の里づくりコンテスト」の審査員を務めました。山形県では朝日町榎平の棚田が受賞しました。非常に素晴らしい景色です。

一方で、最近では自動車社会になり自動車道の沿道は、



美の里づくりコンクールで入賞した朝日町榎平の田園風景（写真提供 朝日町）

中古車店、ガソリンスタンド、パチンコ店など原色看板であふれ、景観が壊れてしまっています。

観光の良さは、地域の自然とそこに住む人々の生活がミックスして、お祭りや食物など独自の風土を生み出していることにあります。それは、土地の気候とそこに住む人によって生み出されたもので、画一化されてはいけないものです。これから山形県民みんなで、景観をいかに維持するか、頑張ってもらいたいと思います。

■ 交流がもたらす効果

町田 観光の効果の1つに、自分たちの持っているものを外の人から見てもらい「自分たちはこんな素晴らしいものを持っているのだ」と初めて自覚できることがあります。そのためにも交流人口を増やすことは大事ですね。

船山 日本の人口が減っていますから、交流人口を増やすためには日本人の観光客のリピートを増やすか、外国人の観光客に来て頂くことになります。日本人をリピートさせる方法としては、例えば、都市と農村の交流などをもっと進めていくべきでしょう。

町田 本当にそうですね。国土交通省が二地域居住を提案していますが、もっと積極的に進めたら良いのではないかと考えています。そのためには移動に伴うコストが課題になります。庄内は、15年前に庄内空港を開設してから、東京との距離がずいぶん短くなりました。そして、慶應義塾大学の先端生命科学研究所、東北公益文科大学が設立されるなどして、多くの人が行き来するようになりました。

また、これからはアジアの世紀になってくると思います。中国やインドが急成長していくなかで、日本はアメリカと成長するアジア諸国との狭間で、非常に難しい立場に立つのかなと感じています。

やっぱりそういう意味でも、韓国や中国などと観光を通じて、もっと相互理解を深めることが、日本の将来にとって大事ではないかと感じています。

船山 今は日本と韓国の間が400万人、韓国と中国の間も400万人、そして日本と中国の間も400万人強と、合計1,200万が移動しています。そしてこの数字を2010年までに1,700万にしようという取り組みが行われています。

過去に日本人がこれだけ交流した時代はありません。お互いに行ったり来たりする関係になるということはいいことだと

思います。見聞を広めて相手の国を知ることは、友情も深まるし、客観的にもものを言うことができるようになります。またこれは、一つの安全保障につながるとも思います。国によっては政治問題などいろいろな問題がありますが、これを乗り越える相互理解のために、旅行は重要な役割を担っていると思います。

■ 住んでいる人が地域を愛する

船山 会長を務めている社団法人日本ツーリズム産業団体連合会では、世界各国の観光消費のうち、外国人がどれくらいかという統計を発表しています。その統計によれば、スイスやオーストリアは外国人観光客が半分以上です。しかし日本はまだ6パーセント程度にすぎません。

これまでの日本の観光は、日本人の観光客だけで充分だったといえます。しかし、これからは外国人の観光客に多くお越しいただくことが必要です。そのためには外国語表記の看板、通訳ガイド、宿泊地の整備などに取り組まなくてはなりません。

町田 その点で観光産業は、波及効果が大きい総合産業ですね。

船山 観光が地域にどういう形で貢献しているのかということは意外と知られていません。銀行はお金を動かす仕事、商社は物を動かす仕事、我々は人を動かす仕事だといっています。このような観光がもたらす効果、具体的には観光による税収効果、雇用の効果など、地域における役割を整理することが必要だと思います。最近、大学に観光学部が新設されるなど動きが出てきましたが、先ほど紹介したスイスやオーストリアは、国をあげて観光に取り組んでいます。

ようやく日本でも、「観光立国推進基本法」が施行されました。今までは「観光基本法」でしたが、この法では国と地方自治体、そして住民は何を為すべきか、それから、観光事業者は何を為すべきかというそれぞれ

の役割が明確に規定されました。

町田 その意味では、われわれ住民の意識も大事です。山形県でも「山形ファンを増やそう」と、観光に力を入れはじめました。行政、民間企業、そして住民が一体となって観光に取り組んでいくことが必要ですね。

船山 そのためにまず、日本の美しい景観を守らなくてははいけません。日本はまだ美しい風景がたくさん残されていますが、ちょっと視線を外すと、どこへ行っても人工物があります。

酒田の本間美術館にはとても美しい庭園があります。しかし、近くには商業施設の看板が建って景観を損ねてしまっています。美しい景観を守るためには、行政が中心になって対応していくことが必要ですし、多くの人々が景観に関心を持つことも必要です。

また、金山町のまちづくりは素晴らしいと思います。景観ができるには、何十年という時間がかかります。金山町はそれを踏まえた景観づくりに取り組んでいます。

町田 まったくその通りですね。尾花沢市に住む友人から聞いたのですが、尾花沢の「尾花」とはススキのことで、その昔、道沿では美しいススキの穂並を見ることができたようです。しかし、今はそのススキを刈り取ってしまっています。美しいものに対して評価する、私たち住民の関心を高めていくことが必要だと思います。

船山 日本の観光は、この40年余り急速に発展しましたが、本当に観光立国、観光立県を目指すためには、財産である、美しい景観を守るために地域が本気で取り組まなくてははいけないと思います。その1つとして、景観に係る農業の振興も重要な課題です。現在のように休耕田が増加していることに、もっと危機感を持たなくてははいけません。

観光は地域全体のもので、観光事業者ができることはわずかにすぎません。観光で大事なのは住んでよし、旅してよしで、「これは地域のもの、これは旅行者のもの」と区別するのではなく、旅行者も地元の人と一緒に飲んだり、話したり、楽しんだりとそこで交流することが大切です。

そのためには、まず地域の人が住んでいるそれぞれの地域に誇りを持つこと、それぞれの地域を愛することが大事だと思います。山形に行くと今でも友達に会います。山形には懐かしい友達がいて、昔ながらの自然があります。「心が安らぐ、ふるさと」を持って、私は幸せだといつも思っています。

町田 山形の素晴らしい自然・食べ物・風景・もてなしの心などを、住む人自身が実感し、その価値を見直すことが、山形の観光振興の第一歩でしょう。

本日は貴重なお話をありがとうございました。



船山会長が大切にしている、新入社員時代の名刺